# FAIRYTAILの世界に転生！

takuyawhite

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＦＡＩＲＹＴＡＩＬの世界に転生！

【Ｎコード】
Ｎ４９５８Ｘ

【作者名】
ｔａｋｕｙａｗｈｉｔｅ

【あらすじ】
転生した先の世界はなんとＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ！？
光と闇の魔導の力をもった主人公が
世界を救うかもしれない・・・

# 転生？

「あれ、頭が痛い・・・・・
ダメだ、立ってられない・・・・・
俺、死ぬのかな？・・・・・」

「早く起きろ、バカタレッッッ！！」
「痛っっった！！！」
なんだここ？
俺は目を覚ますと見知らぬ場所にいた。
「おい、そこの奴、ここはどこよ？」
「ったく、近頃のガキはこれだから困る。
礼儀を知らんからな。」
「そんなことことどうでもいいから、ここどこよ？」
「仕方ないな。ここはだな、人間の世界で未練を残して
死んだものが通る場所だ。」
「えっ・・・・・
もしかして、俺って死んでる？」
「ああ。でなければ、ここにはおらんからな。」
「くりびつてんぎょのいたおどろ！
人間の世界には戻れないのか？」
「無理だ。」
「どうしても？」

「不可能だ。」
「お願いしますっ！
まだ、彼女と別れて無いんです。」
「知るか。は～い、それでは転生を
始める。」
「はぁ！？ふざけんなよ？」
「ここでは、あなたの望む世界にあなたが望む形で
転生出来てしまいます。」
「無視かよ・・・・」
「どこの世界がいいですか？」
どこにしようか？
そうだ、あそこだっ！
「ええと、俺が「ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬの世界ですね。了解しました」人の話聞けっ！」
「人の話は聞きますが、霊魂の話は聞きませんｗ」
「コイツ・・・」
「そのほか、特典オプションは何がよろしいですか？」
ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬって確か、魔法が使えるだったな・・・
「じゃあ、光と闇の魔法が使えるようにしてくれ」
ドラゴンスレイヤー
「滅　竜　魔　導　士と普通の魔導士のトッピングはどうされますか？」
「ドラゴンスレイヤーのトッピングでお願いします。」
「ほかは？」
「ないです」
「それでは・・・・いってらっしゃい！！」
「はい？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・うわぁっ！！」
俺は目の前が真っ白になった・・・・

## 転生？（後書き）

始めまして。
初心者ですが、お願いします。

## マグノリアのフェアリーテイル（前書き）

オリジナルな回です。

## マグノリアのフェアリーテイル

「ふう。ここがフェアリーテイルの世界？
空気が澄んでいるなぁ。」
俺が、そう言っていると・・
「おい、お前。」
何か小さいじいさんが話しかけてきた。
「なんだ、ジジイ？」
「お前、魔導士か？」
「うん、まぁ一応・・」
「どんな魔法を使うんじゃ？
ほれ、見せてくれ。」
えっ！？　魔法を使う？
なにそれ、どうすんの？
「ほれ、早く早く。」
何かせがまれてるぅ！？
まぁ、こうなりゃ一か八かだ。
「見てろよ・・・・・
光竜の咆哮っっっっっ！！！！！！」
ドォーンン。
「まぁ、ざっとこんなモンかな？
（何か、出来てしまったー！？）」
「お主・・・・・・・
少しは加減しろーーー！！」
はい？　見せろっていったから見せたのに・・・・・・・・
「大丈夫だって、木の1本ぐらい」
「たわけっ！前を見てみろ」
「はぁ？前をみろって言ったって・・・・・」
あれ、目の前がすごく殺風景だ・・・・

もしかして、森を破壊してしまったー！？
「本当にお前はなんてことを・・・・・」
「すいません。今すぐもとに戻します・・・・」
「そんなことできるわけ「治癒・再生の光（ヒーリングレディアント）っ！！」治った！？」
「これでどうです？」
「うむ、治ったのであれば問題無い。
ところで、お主これからどうするんじゃ？」
どうするか？　どうしよう？　先のこと考えてなかった
「特にないけど・・・？」
「それなら、うちのギルドに来ないか？」
「ギルド？」
「来てみればわかる。ほれ、付いてきなさい」
「はい・・・」

「ここじゃ、ここ」
「でかいなぁ。」
「まぁ、なかに入りなさい」
「失礼しまーすって何じゃこりゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

「やんのか、ナツ。このやろう」
「上等だ、グレイ」
「喧嘩なら他所でやってよ」
「やるのか、エルザ？」
「ミラジェーン、後悔するなよ」
「ったく、うるせぇなぁ・・・」

すいません、ここ何か危ないところですか？

「やめんかぁあああああ、クソガキ共！！」
「「「「おかえり（なさい）、マスター」」」」
「グレイ、逃げだしやがって、俺の勝ち「パンッッッ！！」・・・・・」
「マスター、こいつは？」
「おお、こいつはな、そこであってな、
フェアリーテイルに入るそうじゃ」
はい？　今なんと？
「何ィ！？　それなら俺と勝負しろ！！」

「やだよ、めんどくさいし」
「なんだと!?てめぇ?
これでも喰らえ、火竜の鉄拳っ!!」
「邪魔だ・・・。」
と言って手に力をいれ、指を上に曲げる。
すると、ナツ?とか言った奴が天井にあたって、
気絶していた。
「あのガキ、触れずにナツを天井にぶつけやがった」
「なんちゅう奴だ」
「お前さんはやっぱり、強いのう」
「そうですか?ってか、僕まだ入ると言ってないですけど・・・」
「「マスター、次は私が戦う（ます）」
「しょうがないな。お主、こういうのはどうじゃ?」
「こういうの?」
「このギルドから3人メンバーを選ぶ。
もし、お主が3人全員に勝てたら、
おまえさんの好きにすればよい。
ただし、負ければおとなしく入ってもらう、よいな?」
「いいですよ、別に。 負けなければいいですよね?」
「そうじゃ。 それならメンバーを選ぶ。
1人目はミラジェーン。 「よっしゃぁ」
2人目はエルザ。 「よし」
3人目は・・・ギルダーツ。 「え、俺?」
以上じゃ。」
「「「「終わったな。」」」」
「あの、ギルダーツがいるなら、無理だな」
なんだと、俺の力見せてやるっ!!

## マグノリアのフェアリーテイル（後書き）

グダグダですいません。
主人公の名前はまだ考えてます。

## 悪魔V光のドラゴンスレイヤー（前書き）

主人公の名前決まりました。
クロム・アルデントです。

## 悪魔V光のドラゴンスレイヤー

俺は今、これからの人生をかけて勝負しようとしている。
まぁ、勝つけどね・・・・
「さぁ、やろうか。
新人君。」
「おい、まだ入るって言ってないぞ。
それに、俺はクロム・アルデントだ。」
「それでは、始め！！」
マスターの合図がかかる。
次の瞬間、ミラが変身していく。
「これは、私の魔法『サタンソウル』だ。」
なるほど、だから人間に見えないのか。
と、思っていたらミラの右手が入っていた。
「痛っ！　いきなり何すんだよ！？」
「戦いはもう始まって居るんだぜ」
ロスト・マジック　トワイライトレイ
「それなら、こっちも『古　代　魔　法　夕　闇　の　光』！」
「何！？」
魔法を唱えた瞬間、自分の全身から光が放射される
「「「なんだこれ、前が見えない」」」
そう、この魔法は敵の目をくらますことができる
「チッ、これじゃ、クロムのヤローがどこにいるか分からねえ」
シャイニング・フィスト
「今度はこっちからいくよ！　闘　光　拳　！！」
「自分の両手に神々しい光が灯る・・・・
「そんなに光らすと、私にチャンスを与えてるモンだぜ」
「わざとだよ。」
そうわざとだった。

さすがに女の子をぼこぼこにするのは気が引けたからだ
「舐めやがって・・・」
「気が抜けてるよ、そら」
僕は、足を出して引っ掛けた。
ミラはそのまま後ろに倒れた。
「ちっ、しまった。」
「終わりだ・・・」
そう言って、ミラの顔の横に拳を叩きつけた。
正確には叩きつける前に止めた。
しかし、まとっている光の圧力で地面が粉々になった・・・・
「そこまでぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!
勝者、クロム!!」

side：ミラ
「まけちまった・・・・」
クソ、なんで私があんな奴に負けたんだ・・・・
「おい、大丈夫？」
誰だ、話しかけてくる奴は？
「おい、クロム、バカにしきたのかよ」
「違うよ、心配できたんだ。
ケガとかしてない？」
なんでこいつは、負けた私に話しかけてくるんだ？
こんな奴に負けたのかと思うと、イライラした。
「それにしても、ミラは強いな。」
「強い？　私はお前に負けたんだぞ！」
「・・・・・・!?」
私は泣いていた・・・

「ごめん、気に触ったなら謝るよ。でも、そんなに気を張らなくてもいいんじゃない？そりゃ、長女だから、そうなのかもしれないけど、
その前にミラは『女の子』なんだよ？もっと、男の子を頼ったら？
そうしたらもっとミラらしくなるんじゃないかな？」
女の子？
初めてだった。女の子扱いされたのは・・・・
こんなに優しくされたのも初めてだった。
そう思うと、胸が熱くなった。
「どうしたの、ミラ？　顔が赤いよ？」
「なんでもない・・・・・」
クロムが好きだ。
こんな感情は初めてだった・・・・
「ほんとに大丈夫？」
私のことを心配してくれる優しく、強いクロム。
よーし、自分で言ったことだ。　責任をとってもらおうっと
そして、クロムに抱きついた。
「ちょっ！？　ミラ？」
「エルザなんかに負けたら許さないよ？」
「分かったよ、ミラ」
「よろしいっ！」
「顔赤いぞ、クロム！！」
「黙れ、上半身裸野郎」
「何時の間にぃ！？」

ｓｉｄｅ：クロム

さっきからきついオーラが後ろに・・・・・

「私を待たせるとはいい度胸じゃないか」

## 悪魔Ｖ光のドラゴンスレイヤー（後書き）

次回、ＶＳエルザ戦です

## 光ｖｓ騎士（前書き）

久しぶりの更新です
それでは本編にどうぞ

## 光ｖｓ騎士

ｓｉｄｅ：クロム
「さぁ、次は誰だっけ？」
「私だ！！」
「うん。よろしくね。
えっと・・・・・・？」
「エルザだ。
それにお前、私を待たせたことを
忘れていないよな？」
「うん。
手加減はしないよ」
「もちろんだ！」

「始め！！」
マスターの声が響く。

「換装！
天輪の鎧！」
「・・・！？
スゴッ！　鎧が変わった！」
「気が抜けているぞ！
サークル・ソード
循　環　の　剣！」
「うわっと・・・・
危ない、危ない。」

「そこだっ！
ブルーメン・ブラッド
繚　乱　の　剣　　」
「ぐぁっ！？
やったな・・・
今度はこっちの番だ！」
手のひらに魔力を集める。
そして、エルザの目の前に・・・・
「フォトン・ブラスト！
粒　子　の　光　爆！」
強い爆風がエルザを包む・・
そして、エルザが後ろへぶっ飛んだ・・・
「やりすぎたかな・・・・」

ｓｉｄｅ：エルザ
あいつの魔法はまだよくわからない。
ミラの時は、地面に近づけただけで
地面を叩き割った。
そして、私を吹き飛ばしたあの技・・・
技を使う一瞬に隙があった・・・・
そう、移動速度が遅くなることであった。
そこをつけば勝てないわけない！

「行くぞ！
サークル・ソード
天輪・循環の剣！！」
「危なっ！
今のは危なかった・・・・・」
余裕でいられるのも今のうちだ。

ｓｉｄｅ：？？？
「あのガキ、本気で戦っていねえ。
それに、あいつから別の魔力を
感じる。あいつは一体、なんなんだ？」

ｓｉｄｅ：クロム
エルザ、お前ほんとに手を抜く気ないな！？
ほんとに、お前の魔法あぶねぇ・・・・
しかし、そろそろけりつけないとな・・・
「次で終わらす！！」
「何！？」

「古代大魔法
古より生まれしその光・・・
我が身に宿りて敵を倒せ
スターダスト・グリッター
星　屑　の　輝　き　！」
「何っ！？　きゃぁ」
エルザは俺の腕から発せられた
細かい光の粒子にぶつかり、
吹き飛ばされた。

「クロムの勝ち！！」

ｓｉｄｅ：エルザ
負けた・・・・・
しかし、気持ちよかった
負けたのにこんな気持ちに
なるとは思わなかった・・・
清々しい、とても・・・・・・
私が、そんなこと考えていると
クロムが話しかけてきた・・・
「おーい、大丈夫？」
「大丈夫だ、心配するな」
私のことを心配してくれていたのだな
優しいやつだ、こいつは。

ナツとグレイが私が負けたことを
笑っていたが、あいつら、後で
どうなるか覚えておけよ？

「どいつもこいつもだらしがねぇなぁ！？
戦いってのはこうやるんだよ！！！」

目の前にラクサスの魔法が迫って来た・・・
よけれない、もうだめだ・・・・・・

## 光ｖｓ騎士（後書き）

次はまさかのラクサス割り込み戦です。

## 光ｖｓ雷（前書き）

急遽、ラクサス戦です

## 光ｖｓ雷

ｓｉｄｅ：クロム
「ったく、危ないじゃんか。
遅れてたら重傷だよ？
ってか、あんた誰？」
「俺の名前はラクサスだ。
一応、ギルド最強候補だ。
お前、まだ力隠してんだろ？
出してみろよ、ほら」
「クロム・・・お前私を守っ「エルザ下がって」・・・・・ああ」
「ラクサスとか言ったけ、こんなところで本気を
出すつもりじゃなかったのに・・・・・・・・
後悔するなよ・・・・」
「するわけねぇだろっ！！」
そう言ってラクサスは雷を飛ばして来た。
僕は動かなかった・・・・・・
「ははっ、直撃かよ！？
弱えなぁ・・・・」
「おい、さすがにラクサスは相手にできんだろ・・・・」
「ラクサスが強すぎる・・・・・・」

煙が晴れた・・・・・
「おい、こんなもんか・・・・・・
しょぼいな・・・・・」
「なら、これでも喰らいなっ！！
鳴り響くは招雷の轟き・・・・・天より落ちて灰燼と化せ！！
レイジングボルトォォォォォォ！！」

「そんなモン効かん。そろそろ反撃するか・・・・・・
古代より生まれし闇の力・・・我に宿れ！！
カオスソウル
闇　の　魂！！」
「カオスソウル！？」
「混沌の闇より生まれしの力・・・・敵の存在を消すことなかれ・・・・」
カ　オ　ス・ゼ　ロ
混　沌　の　虚　無！！」
「何！？　ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
「これで終わりだ・・・・」

「嘘だろ・・・・・・ラクサスが一撃で・・・・・」
「ありえねぇ・・・・・・」

side：マカロフ
こいつはたまげた・・・・
これがこいつの本当の力・・・・・
いや、その一部・・・・・
強すぎる・・・・・
これじゃ、あやつでも勝てるかどうか・・・・・

side：ラクサス
あいつ、バケモンか・・・・

まだ、本気を出さないのか・・・・・・・
これじゃ・・・・・あのおっさんでも無理か・・・・・

ｓｉｄｅ：クロム
あぁ～、やっちゃた・・・・
一撃でぶっ飛ばしてしまった・・・・・
どうしよ・・・・・・
あれ、エルザが来る・・・どうしたんだろ？

ｓｉｄｅ：エルザ
クロムが私のために・・・・・
あのラクサスを一撃で倒してくれた・・・
このことで胸がいっぱいだった・・・・
ありがとう、クロム・・・・・
そうクロムに言うために・・・・
彼の元へ駆け寄った・・・・

ｓｉｄｅ：クロム
「ありがとう、クロム。　おまえのおかげで助かった。」
「いや、俺はただ、自分と自分の仲間を守ることで精一杯っだった。
それに、エルザがいてくれるおかげで俺はラクサスに勝てたし、
闇にも落ちなかった・・・・」
「闇に？・・・・・・・・」
「いや、なんでもない。　ありがとう、エルザ」
「いっ、いや、その、あっと、えっと、
こちらこそ・・・・・・・」

なんで、ミラといい、エルザといい、
俺と戦ったあと、顔が赤くなるんだ？
まさか、風邪ひいてたんじゃ・・・・・・
だから、俺でも勝てたのか・・・・・
じいさん、お前なんてことを・・・・・

ｓｉｄｅ：エルザ
あいつの笑った顔、優しかったあの頃のあいつに似ていた・・・・
この時だ、私がクロムのことを好きになったのは・・・・

ｓｉｄｅ：おっさん
おいおい、マスター聞いてねぇぞ
あのガキが、ラクサスを一撃でぶっとばすとはよぉ
こりゃ、俺も本気出さないとマジで死んじまう・・・・
ほんと、あぶねぇ・・・・・・

## 光ｖｓ雷（後書き）

すいません、何か主人公強い・・・・・・

まぁ、次はね・・・・・・・

## 最強のおっさん（前書き）

ＶＳギルダーツ戦ですっ！！

## 最強のおっさん

ｓｉｄｅ：クロム
はぁ～。やっと最後か・・・・・・・
これで僕も晴れて自由になれるっ！！
さぁ、頑張ろう！！

ｓｉｄｅ：ギルダーツ
そろそろか・・・・・

「それでは、始めぇ！！」
マスターの合図がかかった。

ｓｉｄｅ：クロム
「いくよ、おじさんっ！！」
「初対面の相手に『おじさん』呼ばわりか・・・・・・」
「ラクサスが呼んでたから・・・・・・
名前じゃなかった！？」
「当たり前だろ！！　そんな名前あるか！
俺はギルダーツだ。　よろしくな」
二人は間合いを取りつつ、こんな会話をしていた。
「先手必勝。いくよ！」
クロムは自分の両手に光を灯した。

そして、その右手でギルダーツを殴ろうとした。
しかし、それは通らなかった・・・・・・・
「こんなもんか・・・・・おらよっと。」
ギルダーツがクロムの攻撃を交わし、逆にクロムに攻撃した。
これを皮切りに、クロムの攻撃は一切当たらず、試合は終わった。
正確には、ギルダーツにボコボコにされた。
そして、そのまま気を失った・・・・・・・・・・・・

「「おい、クロム、クロム。」」

誰だ、僕を読んでいるのは・・・・・・・
少し目を開けると、エルザとミラがそこに居た。
「あれ、なんで寝てるんだろう？」
「クロム、お前はギルダーツにボコボコにされたんだ。」
「マジで！？　あのおっさん、弱そうだったのに・・・・・・」
「何言ってんだ、クロム。ギルダーツはうちの最強魔導士だぞ！！」
「なんだって！？　マスター、俺にそんな奴と戦わせたのか・・・・・」
エルザとミラと話しているとギルダーツとマスターがやってきた。
「おう、起きたかクロム。　どうだ調子は？」
「どうだじゃないよ。ボコボコにしたのギルダーツだろ。」
「すまねぇ、俺はどうも手加減ってのができないんでな。」
「ケガが治ったら、もう一回戦ってもらうよ。」
「そいつはできねぇ。これから１００年クエストに行くんでな。」
「「１００年クエスト！？」」
「なんだそれ？」
「仕事だ、仕事。じゃぁな」
「ギルダーツ頼んだぞぉぉぉ」
マスターが大きな声で叫ぶ。
ギルダーツは右手を上げた。
そして、見えなくなった。

「そうじゃ、クロム。ＦＡＩＲＹＴＡＩＬに入ってもらうぞ。」
「はい、わかりました。（この人、案外せこいな・・・・・）」
そうして、クロムはギルドに入ることになった。

## 最強のおっさん（後書き）

ギルダーツ、強えええええ！！
化け物を超えてしまいました・・・・・・・
次から、本編です。

# FAIRYTAIL（前書き）

原作突入！！

**FAIRYTAIL**

数年後・・・・・・・・・・・・

side：クロム

「あの、お、お客様！？　大丈夫ですか！？」
駅員が少し焦りながら、自分たちに尋ねて来た。
最も、大丈夫じゃないのは彼だが・・・・・・・・
「あい。いつものことなので」
それに慌てたそぶりも見せず答える猫。
ナツの相棒兼保護者（？）のハッピーである。

「ハァ・・・ハァ・・・・だい・・・・じょうぶ・・・じゃねーぞ」
そしてこの今にも召されそうなナツ。

「はむっ。　これおいしぃ～。　クロムも食べるぅ～？」
そして、人の頭の上で美味しそうにケーキを食う猫。
僕の相棒であり、生粋の甘党であるスィート（♂）である。

「・・・・なんでこうなったんだっけ・・・・・・・・」
そして、この僕、クロム。僕がギルドに入ってからもう数年たち、いろんなことがあった。そして今、ナツのお父さんを探しに列車に揺られていた。
・・・・・・・・列車でくるんじゃなかったよ、ナツ。

僕たちは、ハルジオンの港を目指している。ギルドの仲間からの情報で、
サラマンダー
ハルジオンに　火竜　がいると聞いて、駆けつけているというところです。

とまぁ、現状について説明し終わったところで、

「う～ん。　ミラ特製ショコラケーキ美味しかったぁ～。
あれ？　クロム駅についてなぁ～い？」
と、頭の上から満足した声が聞こえた。コイツとあったのは・・・・・・
って、まぁそれはあと。　いっつも甘いもの食べているけど、真面目なときは真剣になれるから、信頼してる。
「ホントだね。　ナツ～、ハッピー？　降りるよ？」
サラマンダー

「あい。情報がほんとならここに　　火竜　　いるはずだよ。行こう。」

「ちょっとォ・・・・・・休ませて・・・・・・」
そして、今にもリバースしそうなナツ。

「うん。」
頷くハッピー。

「おい、ナツ急がないと列車出ちゃ・・・・・・」

それでは、列車が発車するので、黄色い線までおさがりくださーい。
ガタン　ゴトン　ガタン　ゴトン

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

たぁ～すぅ～けぇ～てぇ～

「あれ、ナツは？」
「そういえば、いないね。　どこ行ったんだろ？」
そして、一時間後ナツがやってきた。

ｓｉｄｅ：？？？

「えっーーーーー！！この街、魔法屋一軒しかないの！？」

「ええ。もとより魔法より漁業の方が盛んですから。街の住人も魔法が使えるのは一割もいません。
　この店も、旅の魔導士専門の魔法屋なんですよ。」
あたしの失望した声にこう答えた店主。ここはハルジオンの魔法屋。

落ち込むあたしにいろんな新しい魔法を見せてくれる店主。
カラーズ
でも　色替　は持ってるし・・・・・

ゲート
「私が探してるのは　門　の強力なヤツ。」
ゲート
「　門　かぁ、珍しいですねぇ。」

「あっ！！！！！！」
店の中を見て回ると・・・・・・
ホワイトドギー
「　白い仔犬　だぁ～。」
珍しいものを見つけちゃった。　店主が何か言ってるけど気にしない、気にしない。
とってもほしかったんだぁ～、これ。

「いくら？」

ジュエル
「2万　J　」
と店主が答えた。

２万かぁ～。たかいなぁ～。よし、ここは・・・・・・・・

「本当は、いくらなんですかぁ～、ステキなお・じ・さ・ま？」
必殺お色気作戦！！　胸を上げて、上目使いで・・・・・・・

「結局、１０００ジュエルしかまけてくれなかった。私の色気は１０００ジュエルかぁーーーーー！！！」

あたしの名前はルーシィ。これでも一応魔導士。年は17歳。ちょっとしかまてけもらえなかったことで
看板に八つ当たり。周りの人がジロジロ見てくるが気にしない。

「？？？」

街の女の子が広場で黄色い歓声をあげている。

「何かしら？」

「きゃぁ！？」

「この街に有名な魔導士様が来てるんですってぇ～」
サラマンダー
「　火竜　様よーーーーっ！！！」
後ろから走ってきた女の子たちに突き飛ばされてしまった。
それより、
サラマンダー
「　火竜　！？　あの店では買えない炎の魔法を操るとかいう・・・・
この街に来てるの！？」

あたしは一気にそちらに興味が行ってしまった。　とても有名だし、そして・・・・・・

「「「「「「「きゃー　きゃー　こっちをむいてくださーい？」」」」」」」

目をハートに変えていく女の子が増えって言ってる・・・・・・

「かっこいいのかしら？」

しょうがない、百聞は一見に如かず。

あたしも　火竜　サラマンダー　のところに行った見ることにした。

side：クロム

「列車には2回も乗っちまうし・・・・・・・」

「ナツは乗り物弱いもんね」

「ごめん、ナツ。置いてちゃって・・・・・・」

「クロムぅ、僕は美味しかったよぉ～・・・・・」

ふらつきながら歩くナツに謝る僕。　そして、スィート。お前は人の頭の上で食べ物を食うな！！

「ハラ減ったなぁ～・・・・・・・・」

「僕も甘いもの食べたぁ～い・・・・・」

「ほんとごめんっ。　スィート、お前今さっきケーキ食べたろ？」

謝りながら、怒るって難しい。でも、僕にはできるっ！！　これもギルドのおかげ。

サラマンダー

「なぁ、ハッピー、クロム。　火竜　ってイグニールのことだよなぁ？」

「うん、火の竜ってナツとイグニールしか当てはまらないイメージだよね」

「あい！！」

「・・・・・・・・・・・おいしぃ～・・・・・・・・・・・・・・・」
おい、スィート寝落ちしかけてるぞっ！！

「だな！　やっと見つけた！　ちょっと元気になってきたぞっ！！」

「あい！！」

「それは良かったね」
まぁ、街にドラゴンがいたら大騒ぎだろうけど・・・・・・・

サラマンダー
「「「「　火竜　　様～」」」」

「「っ！！！（！！？）」」

「ええっ！？」

「ナツのお父さん見つかったぁ～？」

まさか、この街にいるの！？　えっ！？　ほんとに！？

ってか、スィート一人だけ反応が違いすぎっ！！

「ほら！！　噂をすればなんとかって！！」

「あい！！！！！！」

「イグニールっ！！」

「あっ、待ってよナツ。」

ナツは、女の子をかき分け入っていった。僕もナツを追いかけた。

ｓｉｄｅ：ルーシィ

（な、な、何？　このドキドキは！？　ち、ちょっと、あたしってばどうしたの？）

「ははっ、困ったな。これじゃ歩けないよ」

真ん中に佇んでいるひとりの男。その人を見た瞬間、あたしはドキドキがさらに激しくなった。
なにこれ？どうなってるの？

（はうぅ！！！！）

ドキドキしていると彼と目があった。ダメ、胸がくるしいっ！？

（彼が有名な魔導士だから？だからこんなにドキドキするの！？）

「イグニール！！　イグニール！！　イグニール！！」

誰かの声が聞こえるけど気にならない。

ｓｉｄｅ：クロム

「誰だ？オマエ」

「！！！！！」

汗を流しているナツと、ナツの放った言葉にショックを受ける男。

サラマンダー

「　火竜　と言えばわかるかな？」

来た、決め顔・・・・・気持ち悪い・・・・・・って、ナツどうしたの？

「はやっ！？」
驚く自称サラマンダー。

一応、聞いてみようか・・・・・・・

「あの、すいません。もしかして、ドラゴンですか？」

「見れば分かるだろっ！！　俺は人間だっ！！」

もしかして・・・・・・

「ナツのお父さんじゃ・・・・・・？」

「俺にまだ子供はおらんっ！！」

やっぱりかぁ。　そりゃまぁそうか。

「あんた、失礼じゃない！？」

「あれっ？」

ナツが女の子たちに首を絞められながら、こっちへ来た。

「まぁまぁそのへんにしておきたまえ。彼だって悪気があったわけじゃないだからね」
と言って、おもむろにサインを書き始めた。

「僕のサインだ、友達に自慢するといい」
またもいい顔で言ってくる自称　サラマンダー　火竜　。

「いらん。」

そして即答で答えるナツ。

「「「「どっかに行って、邪魔よ」」」」

「うげっ」

「なんで僕も！？」

二人とも蹴り出されてしまった・・・・・・

僕なんにもやってなのに・・・・・・・・

「君たちの熱い歓迎はありがたいけど・・・・僕はこの先の港に用があるんで、失礼するよ」

パチン

そういったあと、男は指を鳴らして、炎を出し、舞い上がった。

「夜は船上でパーティをするんだ。　みんな参加してね。」

「「「「「もちろんで～す」」」」」

周りの女の子を誘って、港の方へいった。　あれ、ナツのほうが火力上の方な気がしたんだけど、

サラマンダー

なんであいつが　火竜　なんだろう？

「なんだアイツは？」

「なんで僕までけられたんだろ？　恋の所為かな？」

「なんだ、ソレ？」

とナツと話していると

「本当、いけ好かないわよねアイツ」

「「！？」」

「こんにちは。さっきはありがとう。」

「んっ」
「あい」
「こんにちは。」
「クロムぅ、このショートケーキ美味しいよぉ～」

何か一匹だけ、次元が違う。　スィート、お前か。

「おまふぇいいひゃふだ」

「えっと、おまえいいやつだっていってんだろうね」

「あい！！」

「このモンブランしゅっごくおいしぃ～。クロムも食べるぅ～？」

僕は今、通訳をしています。なので、モンブランは食べれませんっ！！

「あはは・・・・・ナツとハッピー、それからスィートだっけ？ゆっくり食べなよ。
何かいっぱい飛んで来てるし。それに、クロムは食べなくていいの？」

ルーシィは苦笑しつつ、僕にきいてきた。ルーシィ、君はなんて優しいんだっ！！

「うん、大丈夫だよ。ここは僕が出すからルーシィも食べたら？」

「いや、あたしは今さっき助けてもらったんだから」

チャーム

ルーシィ曰く、さっきの男は　魅了　を使っていたらしい。あれって確か禁止のはず・・・・・

ほかの女の子たちはダメだったけど、ルーシィは僕らが飛び込んだおかげで魔法が解けたらしい。

しかし、

「いいよ。僕は結構お金あるから。それにナツは助けるつもりじゃなかったんだし。

それに、こんな可愛い子に奢らせたら友達に怒られちゃうよ。」

うん、ミラとエルザそしてレビィに。　ってかあの三人にお金を出してもらった覚えがないよ。

僕が、そう言ったらルーシィも引き下がってくれた。

「そういえば、あたしこう見えても魔導士なんだぁ～」

「そうなんだ。」

「ほ～ン」

僕は、相槌を打ったけど、ナツは何言ってんのかよくわかんない。

通訳？今は、ルーシィと話したほうが僕には得だ！！

「まだ、ギルドには入ってないんだけどね・・・・・・。あ、ギルドっていうのは・・・・・」

「ああ～、大丈夫。仕事をくれる所でしょ？」

「うんっ！！クロムも詳しいのね！！」

とっても喜んでるルーシィ。そりゃあ、まぁ、ギルド入っているし・・・

「でもね、人気のあるギルドは入るのが厳しいらしいのよね・・・。あたしの入りたいところはすごい
人気で、それですっごい魔導士が沢山集まるところなんだよね。・・・・でも、私は絶対そのギルド　ギルドに入るんだぁ。あそこな

ら大きい仕事が沢山もらえそうだから」

「へぇ、そうなんだ」

ということは、フェアリーテイルにくることはないのかな・・・・・・残念・・・・

ところで、ナツとハッピーというと

「ほ・・・・・・・ほぉうはのか」

「よくしゃべるね」

お前ら、失礼すぎだろ!!

後で、説教!!が必要だ!!

「そういえば、あんたたち誰か探してなかった?」

ルーシィが尋ねて来た。

「ああ、ちょっとね・・・・」

「あい、イグニールを」

「この街に　火竜　イグニール　が居るって聞いたんだけど、違ったな」

「見た目が違うからね」

「見た目が　火竜　サラマンダー　って・・・・どうなのよ、人として・・・・」

「それはそうだね。その疑問は間違ってないよ、ルーシィ・・・・」

「あ？　何言ってんだ？　人間じゃねぇよ、イグニールは本物のドラゴンだ」

「ーーーーーーーーーーーーーーー！！？」

ルーシィは驚き、そして叫んだ。

「そんなのが街の中にいるわけないでしょーーーーーーーーーー！！！！！」

ルーシィの一言で、ナツとハッピーが驚いた顔になる。

「やっぱり・・・・・・・・・」

落ち込んでいる僕に

「クロムぅ、このデラックスバニラパフェおいしいよぉ～」

と軽く、１０品ぐらい平らげている相棒が声をかけてきた。

「それじゃ、あたし帰るね。」

「うん、またね。　ばいばい」

「あ、クロムこれだけは受け取って。」

「いいよ、気を遣わなくても・・・・」

「でも助けられたのは事実だから、おねがいっ！！」

「分かった。ありがたくいただいておくね。」

「じゃ、コレやるよ」

ナツは　火竜　サラマンダー　のサインを渡そうとしたが、

「いらんっ！！！」

ルーシィに拒否された。

その後、クロム以外のメンバーでレストランを7軒ハシゴしたとい

う
・
・
・
・
・
・
・

## FAIRYTAIL（後書き）

長くなってしまいました・・・・・・・・

ちなみに、スィートは太ってませんw

## はい、アウト（前書き）

前回の続きです！

## はい、アウト

side：ルーシィ

ナツたちと別れて、今はベンチで読書中。　魔法専門誌の週刊ソーサラーを読んでるの。
この雑誌には、あたしの入りたいギルドのことも載っていた。

「フェアリーテイル、また問題を起こしたの！？」

フェアリーテイル
妖精の尻尾　。ここが私の入りたいギルドだった。

「今度は何をしでかしたのかしら・・・・・・デボン海賊一家壊滅するも民家七軒も巻き添えに・・・・・・」

「あはははははっ！！！ほんとやりすぎーーーーーーーー！！！！！」

次のページを開いてみた。グラビアページであった。

「あ、ミラジェーンがグラビアやってる！！！」

そこには、白い髪の可愛らしい女性が水着姿でポーズをとっていた。

「こんな人も、無茶苦茶やっちゃうのかしら・・・・・・？」

ぷっ！　そう考えただけで笑えてきた。

「あっ、フェアリーテイルの特集だっ！！」

そこには、フェアリーテイル最強と名高い人物について書いてあった。

ブライト・フェアリー

「　　光闇妖精　　。戦闘の際、強力な光魔法を操る。さらに、本気を出した場合、全身に黒いオーラを纏い、戦う。
魔法力の高さなどから、聖十大魔導に認められる。しかし、評議員への誘いは断り続けている・・・・・・か」

今、フェアリーテイルのなかであたしが一番憧れている人。とっても強いし、彼氏にしたい魔導士ランキングでもほとんど上位にいる人。　写真は出回ってないけど、クチコミで広まっている。

雑誌を読んだらますますフェアリーテイルに入りたくなった。

「でも、やっぱりこれだけ人気のギルドは入るの難しいだろうなぁ・・・・・・・・あたしも何か強力な魔法使えるようになったらなぁ・・・・・・・」

「魔導士ギルド、フェアリーテイルとってもカッコイイなぁ。」

（私はこのギルドに絶対入るんだから。）

決心を改めていると・・・・・・・・・・・・・

「へぇー、君フェアリーテイルに入りたいんだ。」

「！！！！！」

後ろから人が現れた・・・・・・

サラマンダー

「・・・・・・・・・あんた、　火竜　じゃない！？」

「いやぁ～、探したよ。　君みたいな可愛い女の子を探していてね。どう？　船上パーティ来ない？」

「は・・・・・はぁ！？」

何意味のわからないこと言ってんの、この男！！！！

チャーム
「言っとくけど、私に　魅了　は効かないわよ。あれは、知ってる人には効かない魔法なんだからっ！！」

「やっぱり！！目があった瞬間から、君が魔導士だって思ったんだ。」

サラマンダー
あたしの態度に慌てもせず、　火竜　は言ってきた。
ってか、コイツ、あたしが行くとでも思ってんのかしら？

チャーム
「行くわけないでしょ！！あんたみたいな　魅了　を使ってるえげ

つない男のパーティに」

「あんなのただのセレモニーじゃないか。僕はただ、パーティの間セレブな気分でいたいだけなんだ。」

・・・・・・・呆れた・・・・・・・・・・・・・

「有名な魔導士とは思えないバカね。」

そう言って、あたしは歩き出した・・・。

「待ってよ。」

まだ、何かあるの？なんて思ってたら衝撃のことを男は言った。

・・・・・・・・・

「君、フェアリーテイルに入りたいんだろ？」

ピタッ。・・・・・・・・・あたしの動きが止まった・・・・・・・

サラマンダー
「フェアリーテイルの　火竜　って聞いたことない？」

聞いたこと・・・・・・・・・あるっ！！！！！！！

「あるっ！！！あんた、フェアリーテイルの魔導士だったの？」

「そうだよ。よかったらマスターに話通してあげるよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「楽しいパーティになりそうね？」

「わ・・・・・・・・わかりやすい性格してるね・・・・・・・・・・君」

こうして、あたしは憧れのギルドに入れることが分かったため、船上パーティに行くことになった。

side：クロム

「まさか、7軒もはしごするなんて・・・・・・・・・・・・」

「ふぅ～。食った食った。」

「あい！！」

「ストロベリーケーキおいしかったぁ～。」

食後の余韻に浸っている1人と2匹。と1人。
今僕たちは、街の高台にいます。

サラマンダー
「そういやぁ、　火竜　の船上パーティって、あの船でするのかなぁ？」

そういや、そんなイベントもあったっけ？

「うぷ・・・・・・・・・・・・気持ちワリィ・・・・・・・・・・・・」

「えっ！？　想像しただけで酔うの？ナツ！？」

「あい！！」

ナツの新しい特技？に驚いていると、女の子二人の会話が聞こえてきた・・・・・・・

「あ～あ、私も行きたかったなぁ～、　火竜様　サラマンダーのパーティ。」

「えっ？　ソレ誰？」

「知らないの？今この街に来ている有名な魔導士で～・・・・・・・・・」

ここまでは、全く問題ない。でも、次の瞬間驚くことが聞こえた。

「フェアリーテイルの魔導士なのよ〜。」

「「「「！！！！」」」」

珍しくスイートが甘い食べ物以外で反応を示した。
フェアリーテイル？あいつが？ありえないだろ？

「「あの野郎っ！！」」

ナツと僕だ。

ｓｉｄｅ：ルーシィ

あたしは、今、ドレスに身を包んでパーティに参加してます。

「ルーシィか・・・・・・・・いい名前だね。」

「どーも」

「まずはワインで乾杯しよう。」

「ねぇ、ほかの女の子たち放っておいていいの？」

「今は、君といたいんだよね。」

そう言うと、男は指をパチンと鳴らした。

「口を開けてごらん。葡萄酒の宝石が入ってくるよ。」

男はあたしに笑いかけながら、こういった。しかし、・・・・・・・

（うっざーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！）

しかし、フェアリーテイルに入るため・・・・・・・・・

（ここはガマンよ！！ガマンガマン！！！）

そう思って、口を開ける、しかし、ワインが入りかけたところで弾いた。

「これ、睡眠薬よね？　どういうつもり！！」

「勘違いしないでよね。あたしはフェアリーテイルに入りたいだけで、あんたの女になるつもりはないの！！」

あたしがそう言い切ると、男は態度が急変した。

「しょうがない娘だ。おとなしく眠っていれば痛い目を見なくて済んだのに・・・・」

「？？？」

ガシッ　ガシッ

「！！」

後ろのカーテンから、人相の悪い男たちが何十人も出てきた。

サラマンダー
火竜　はあたしの顎をつかんでこういった。

「ようこそ、我が奴隷船へ。　他国に着くまでおとなしくしてもらうよ、お嬢さん」

「ちょっと、・・・・・フェアリーテイルは！？」

最悪の展開になることを予想しつつ聞くと、

「言っただろ？奴隷船だと。初めから君を商品にするつもりだったのさ。」

悪びれもせずそう答えた。
あたしが呆然としていたら、・・・・・・・・

サラマンダー　　チャーム
「　火竜　　さんも考えたよな。　魅了　　にかかってる奴は
自分からケツふってくる。」
チャーム
「でも、このネーチャンは、　魅了　　が効いてないみたいだし・・
・・・・少し教えてやるか〜
「へっへっへっへ」

（なんなのよコイツ・・・・・・・・・！！　こんなことする奴が・・・
・・・・・・・・・！！）

「ふーん。門の鍵・・・・・・星霊魔導士か」

男はそうつぶやくと、あたしの鍵を取った。

周りの男たちが、男に質問していたが気にならなかった・・・・・・

「ーーーーーーーーーーつまり、俺には必要ないってコトさ。」

ポイ

その男は鍵を窓から投げ捨てた。これでもう、あたしはなんにもできない女の子。

でも・・・・・・・・・・・・・・

（これがフェアリーテイル魔導士か！！！！）

自分の憧れていたギルドがこんなものかと怒りに震えると共に、
目から涙を流し、葉を食いしばって最低な男を睨む。

「奴隷の烙印をおさせてもらうよ。少し熱いけど気にしないで」

そう言って、烙印を付けようとする。

（魔法を悪用して・・・・・・・・・）

（人を騙して・・・・・・・・・・・）

（奴隷商ですって！？）

言ってやった。思ったことを・・・・・・

〔最低の魔導士じゃない！！」

バキッ！！！！

次の瞬間、天井に穴が空き、人が降ってきた。

降ってきたのは、マフラーをした男の子。

「昼間のガキ！？」

「ナツ！？」

サラマンダー
火竜　　たちは驚き、自由になった手で涙を拭う。

しかし・・・・・・・・・・・・・・・

「おぷ・・・・・・・・・・・・やっぱ、無理」

「えーーーーーー!?かっこわるーーーーーーーーーーーー!!」

ナツは壁に向かって、吐き始めた。ちょ、ちょっと助けに来てくれたんじゃないの!?

「ナツ、クロムは?」

すると、上から声がした・・・・・・・・・・・・・

「クロムならくるけど・・・・・なんでルーシィがいるの?」

「ハッピー!?」

猫が羽生やして飛んでいる!?そんなことより・・・・・・・

「騙されたのよ!!　フェアリーテイルに入れてくれるっていうから・・・・・・それで・・・・・・」

ナツがビクッと動いた。

「まぁ、ちょっと待ってて。そろそろナツがもとにもどるから。」

何言ってるの?思いっきりダウンしてんじゃん!?

あたしが疑問に思っていたら、

ふわっ

船が中に浮いていた。

「あれ！？揺れが止まった・・・・・」

船が完全に止まった。

ｓｉｄｅ：クロム

「これが、ルーシィの鍵だね。」

いつもは自分で飛べるんだけど、スイートのほうが速いし、楽なんだよね。

「ありがと、スイート。」

「後で、デザートおごってね」

僕がお礼を言うと、甘いものをねだってきた。

まぁ、いいか。またミラに頼もうっと。

「それじゃ、この船を止めますか・・・・」

「我、ここに誓う。わが魔力の限り、この場の生けるすべての者たちを守ることを。
光空間魔法
ホーリースフィア
聖なる光の球体　」

すると、船が光を放つ球体に包まれた。

「よしっ。船に乗り込むよ！！」

「うんっ！！」

「クロム！！」

「あ、ルーシィ。またあったね。はい、これ」

「あたしの鍵！！ありがとう！！」

ルーシィに鍵を返すと、僕もあのふざけたやつの方を見た。

「・・・・・・・・・・・・・・」

ナツはもうすでに戦闘態勢。あーあ、終わった。

「おいおい・・・・・・小僧共、人の船に勝手に乗ってきちゃイカ

ンだろ・・・・・・・・おい？」

小僧呼ばわりですか・・・・・・、いつまでその強気が続くか・・・・・・・

「オイッ！！　さっさとつまみ出せ！」

「はいっ！！」

ナツに二人、僕に一人の大男が迫って来る。あんまり、人をなめんなよ！？

「いけない！！ここはあたしがーーーー「大丈夫だよ」「ナツもぉクロムもぉ魔導士だよ？」

ーーーーーーーー嘘ーーーーーーーーーーー！！？」

ルーシィ、そこまで否定しなくても・・・・・・・・・・。

だいたい、一般人がギルドのこと知ってるわけないでしょ・・・・・。

そんなこと考えてたら男共が攻めてきた。

「お前が、フェアリーテイルの魔導士か？」

ナツが奴に聞いた。

「

だから、どうした？」

どっから湧いてくんの、その自信！？

ナツは殴りかかってきた男二人を、片手で弾いて、

「俺はフェアリーテイルのナツだ！！おめぇなんか見たことねぇ！！！」

相手にとって最悪の一言。

「なにっ！！！！！」

「えっ！？」

自称サラマンダーが焦り、ルーシィが驚いていた。

ルーシィは口を開けて、驚いていた。そんなに！？
大したことじゃないのに・・・・・・・・・
僕は今のうちに、男を一人吹っ飛ばしておいた。

「じゃあ、クロムも！？」

「うん、まぁね？」

僕が笑いかけたら、ルーシィは固まっていた。固まルーシィだ。
おもしろいなぁ～。

ナツの告白に驚き出す男共・・・・・・・

「あの紋章っ！！！・・・・・・・まちがいねぇ！！」

「本物だぜ、ボラさん！！」

「ば、馬鹿！！！その名前で呼ぶな！！！」

いまさら、名前なんてどうでもいいのに・・・・・・・・

プロミネンス
「ボラ・・・・・　紅天　のボラ」

「数年前にぃ、はむっ。　タイタンノーズってところをおいだされたんだよねぇ、はむっ。」

ハッピーとスイートが解説してくれた。スイート、そのドーナツどっから持ってきたんだよ！？
まぁ、その食べる姿にルーシィが癒されているんなら、いいか。
そうだっ！！

「ルーシィ、ちょっとコイツだっこしてて？」

「えっ、ちょ、ちょっと！？」

スイートはルーシィの腕の中で満足そうにドーナツをほうばる。
これなら、ルーシィにもスイートにもいいんじゃないか！？

「おめぇが悪党だろうが善人だろうが知ったことじゃねぇ。
でも、フェアリーテイルを騙るのはゆるさねぇ」

ナツは、怒りがたまっていっている・・・・・・・・・・

「それもだけど、僕はちょっと違うね」

「ちょっと、クロム!?」

今思ったけど、ルーシィって今、くくりないよね?

仕方ないよね!

「僕が一番許せないのは、僕の大切なルーシィ（仲間）を傷つけたことだ!!」

「え、ちょ、クロム／／／／／／／／／／／／／／」

「ええい、ごちゃごちゃうるせぇガキどもだ!!!」

そう言って、ボラは僕たちめがけて炎を放った。
舐めてんのかな、コイツ？

「ナツ！！！クロム！！！」

動き出そうとするルーシィを止めるハッピー。ってか、スイート手伝え！！

「まずい」

「何だァこの炎は？オマエ、本当に炎の魔導士か？こんなまずい炎は初めてだ」

「・・・・・・・・・・・・！！！」

「はぁ！！！！！！！！！？？？？？？？？？？」

やっぱり、みんな驚くよね・・・・・・でも、女の子がそんな顔したらだめだよ？ルーシィ

「御馳走様でした」

ナツが食べきると、同時に

「な・・・・な・・・・・・・なんだコイツはーーーーーーーーーーー！！！！！！！」

「火を・・・・・食っただと！？」

男共が叫んだ、

「ナツに炎は効かないよ、クロムの以外は」

ハッピー先生、ありがとうございますっ！！

「聞いたことあるぞ！！！ボラさん！！桜色の髪に、鱗のようなマフラー・・・。

間違いねぇ！！コイツ、本物の　火竜　サラマンダー　だぁーーーーーー！！！」

えっ！？　火竜　サラマンダー　ってナツだったの！？

「でも、もう一人は大したやつじゃないだろう！！まず、そいつからやってしまえ！！」

「クロム、危ない！！」

ルーシィが叫んでいるが、よくわからない。

煙が、晴れた・・・・・・・

「誰が、ナツより弱いって？」

「光より生まれし、魔法よ。その力を我に示せ。

ライトニングサイクロン

光の竜巻　　！！！」

ボラの魔法と共に男共も吹っ飛ぶ。

ルーシィは目が慣れていたのか、こうつぶやいた。

ブライトフェアリー

「　光闇妖精　　・・・・・・・・（でも、闇の魔法なんて使

ってないよ？）」

どっから聞いたんだろ、そのあだ名。
まぁ、気に入ってるからいいけどね。
さぁ、聖十大魔導士だよ？　覚悟はいいのかな？

「いっくぞぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！」

「光の魔法で潰してやるよ？」

side：ルーシィ

「・・・・・・・・・・・・」

あたしは目の前の現実が信じられなかった・・・・・・・・・・・・

「スゴイ・・・・・・・・・・・・」

ナツはもちろんスゴイ。火を吐いたり、食べたり。でも・・・・・・・・

「これが聖十大魔導士・・・・・・・・・・・」

クロムはもっとすごかった。両手に光を灯し、いろんな光の魔法でどんどん倒していく。光の剣を使ったかと思うと、今度はヤリだったり、
片手から、光の竜巻を放ったりしていた。

そして・・・・・・・

「かっこいい・・・／／／／／／／／／／」

そう、つぶやいてしまうぐらい。いつもはぼんやりとして、なんか弱そうな
感じだけど、今は眼がキリッとしている。それに、クロムの放つ光を見ていると落ち着く。彼氏にしたい魔導士ランキングの上位に入るのが
わかるぐらい。

「また一人、クロムの毒牙に貫かれました・・・・・」

「えっ！？」

ドーナツを食べ終わったスイートが話しかけてきた。ってよりも、ちょっと!?

「ち、違うって!! あたしは・・・・・・・」

「いや、今さっきのルーシィの目は恋する乙女の目だったよ?
一応言っとくけど、クロムは競争率たかいよ?その上、鈍感だよ?」

「もう、だから違うってば!!!」

「最後まで聞いてよ。とにかくクロムを彼氏にしたいんなら、僕のところに
甘いもの回してよ。そうすれば、クロムのコト教えてあげるからさ。」

「だから、言ってーーーーーーー」

あたしは一方的に話すスイート黙らせようとしたんだけど、

「ルーシィ、終わったよ♪」

「ーーーーーっ！？ク、クロム！？／／／／／／」

目の前にクロムの顔があった。ち、近いよ～。

「クロム、おつかれさまぁ～。シュークリームたべるぅ～？」

この仔猫ちゃん、態度変わるの早っ！！！

「まぁ、ナツが頑張ってくれてるから、いつも以上に・・・・・・」

「え？　ええっ！？」

ｓｉｄｅ：クロム

僕がまわりを見回すと、イカダの上に乗っていた・・・・

「クロムゥ、あれって軍隊じゃない？」

「本当だっ！！ナツ！！逃げよう！！」

「マジか！？　やべぇ、逃げんぞ、ハッピー！！」

「あいさー！！」

「ルーシィ、どうする？」

すると、ルーシィが僕から離れる・・・・・・・・・
嫌われちゃった・・・・・・・・・・

覚悟を決めて、もう一度尋ねる。

「うちのギルドに入りたいんだろ？来なよ！」

「でも、あたし強くないし・・・・・・」

「強さなんて関係ないよ。ルーシィがどうしたいのかが一番重要なんだよ？
絶対に入るんだろ？　フェアリーテイルに」

「そうだけど・・・・・・」

「弱いのが気になるんだったら、心配ないよ。」

「？」

「僕が、絶対にルーシィを守ってみせるから！！」

「・・・・・・・・・・っ！／／／／／／／」

あれ、ルーシィが真っ赤になっていく、どうしよう・・・・・・・・

「はい、アウトォ〜」

頭の上で、声が聞こえた。

「このあんことバニラは合わないね！」

スイートが怒っていた。

「じゃあ、よろしくお願いします。」

「じゃあ、行こうか。」

「えっ！？　き、きゃっ！！」

僕はルーシィをお姫様抱っこしたままギルドへ帰った。

ギルドへ帰っている途中、ルーシィの体温がすごいスピードで上がっていったので、僕はほんとに焦った・・・・・・・・・

ナツとハッピーは軍隊に捕まって、説教を受けたらしい。
僕がしなくてもよかったのか・・・・・・・・・・

## はい、アウト（後書き）

やっとおわた。
次回、マスターのめいげんでるか！？

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4958x/

---

FAIRYTAILの世界に転生！

2011年11月11日05時11分発行